

## 「保育内容・言葉Ⅱ」におけるストーリーテリングの実践

田中麻紀子

TANAKA Makiko

本稿は「保育内容・言葉Ⅱ」の授業内でおこなったストーリーテリングの実践報告である。学生たちはこれまでの経験上、ほとんどおこなう機会のなかったストーリーテリングを実際にやってみるにあたり、どうやってお話を覚え、またやってみてどう感じたかを記述させた。それを基に保育現場でストーリーテリングをどのように活かせるかを考える。

キーワード：ストーリーテリング 保育内容・言葉 保育者

### 1. はじめに

本学では1回生で「保育内容・言葉Ⅰ」を必修で履修し、「保育内容・言葉Ⅱ」を卒業年度の前期に選択科目として位置づけている。2019年度受講者32名が、ストーリーテリングの実践をおこなった。授業内でお話選び、実践、振り返りをおこなう。初めてストーリーテリングに臨む学生がほとんどで、どうやって覚えようかと悩んでいたりと、また、本番当日は緊張したりしている学生も多かった。

ストーリーテリングをおこなうことにより、お話を深く読むことや相手に届くように語り掛けることの難しさを感じてもらいたいという思いでストーリーテリングの実践をおこなった。

筆者は、幼稚園の現場で長く幼稚園教諭として勤務していた。物語を覚えて、お話を純粋に楽しむストーリーテリングをおこなうこともあったが、それよりは劇あそびの導入として取り入れることが多かった。その時は自分で話を作り、子どもの反応を見ながら語ることを進めていった。

絵本を読んだり、紙芝居を読んだりすることも子どもと一緒に物語を共有できるという楽しみがある。しかしストーリーテリングには、自分が発した言葉を子どもがどのように受け止めているかという反応を直に味わうことができる利点がある。筆者も劇あそびの導入で、何度もストーリーテリングをおこなった際、子どもの反応や表情を見ながら語っていると、語ってい

るこちらに乗ってきて話がどんどん進んでいった。また、逆にこちらが熱を込めて語っても、子どもの反応がいまひとつなら言葉も出てきにくくなり、お互いに集中も途切れるという悪循環に陥ることもあった。

学生には、ストーリーテリングの楽しさ、難しさを感じ、保育の現場に出た時に子どもとお話の世界を楽しんでもらいたい。そういった願いを込めておこなったストーリーテリングであるが、最初はストーリーテリングをすることは勿論であるが、知らないという学生がほとんどであった。

そこで学生には、『演習 児童文化 保育内容としての実践と展開』という本の「おはなし」という章を参考にストーリーテリングについて解説をおこなった。本書には〈おはなしとは、絵本などを使わずに、語り手と声と表情だけで物語を語ることである。人形やぬいぐるみなどを補助的に使う場合もあるが、ここでは声と表情だけで表現することを指す〉とある。学生にもおはなし＝ストーリーテリングをおこなう際にこのことを意識して語ってもらった。

同時に保育現場での展開やストーリーテリングを行うにふさわしい環境についても本書を通して伝えた。

また筆者が実際に語ってみるにより、ストーリーテリングがどのようなものかを実感できるようにした。授業内で筆者がおこなった話は『三枚のおふだ』という昔話である。絵を見なくても場面を想像しやすい話であり、ストーリーテリングの題材としてよく使われている。

学生には、話を選ぶ際に①ストーリー性のある物語

であること、②絵を見なくても想像しやすい話であることなどを課題とし、作品を指定しなかった。

本稿では初めてストーリーテリングをおこなった学生がどのようなプロセスでお話を覚えたか、またおこなってみてどのように感じたかなどの記述を基にストーリーテリングを保育の現場でどのように活かせるかを考える。

## 2. 方法

調査期間 2019年8月4日・5日

調査対象 夙川学院短期大学児童教育学科

2回生 3回生

「保育内容・言葉Ⅱ」の受講者 32名

(内、研究に協力すると回答した者 32名)

調査方法 授業内で以下の課題を出す。

- ・ストーリーテリングの実践をおこなう。
- ・ストーリーテリング実践後の授業内で「振り返り」を記述する。

・「振り返り」の内容

1. ストーリーテリングをおこなうにあたり、どのようにお話しを覚えましたか。できるだけ詳しく記述してください。

2. 実際にこなってみて、上手くできたと思うことは何ですか。具体的に記述してください。

3. 実際にこなってみて、上手くいかなかったことは何ですか。具体的に記述してください。

4. 自分の選んだおはなしは、ストーリーテリングに適していましたか。そう思う理由、またそう思わないのであればその理由を記述してください。

5. ストーリーテリングをおこなってみて、感じたことを記述してください。

6. ストーリーテリングは、今後自分の保育にどのように生かせるかと考えますか。その理由も同時に記述してください。

・「振り返り」シートの使用、論文への記載については「研究に協力する」とチェックしていた32名を対象とする。

・エピソードの全てを引用していない。

\*倫理的配慮

研究への協力は自由であること、協力しなくても不

利益にはならないこと、エピソードを使用する際の園名・個人名は匿名にすること、を書面・口頭で伝えた。

## 3. 結果と考察

ストーリーテリングの発表については、事前にくじ引きをして順番を決めた。また普段使用している講義室では、発表者と聞いている学生の間に距離ができ、どちらにとっても良くないと考えた。そこで「模擬保育室」というフローリングで園の保育室のような仕様になっている教室でおこなうことにした。そうすることにより、園で子どもに対しておこなうストーリーテリングのような姿勢や目線で発表することができた。

なお今回のお話選びのポイントは、

- ・物語を選ぶ。(短すぎないもの)
- ・絵を見なくても想像できるもの。
- ・自分の好きなもの。

ストーリーテリングをおこなった学生の振り返りに基づき、今後の実習や保育でどのように取り入れていけるのか、またどのように活かせるのかを考える。

1. ストーリーテリングをおこなうにあたり、どのようにお話しを覚えましたか。できるだけ詳しく記述してください。

・本を見ながら何度か話を読んだ。数行ずつ覚えていって、読めるところを増やした。親や友だちにストーリーテリングをした。

・まずは粗筋を覚えしました。一語一句まちがえないことは私には難しかったので、セリフや方言は忠実に、その他は覚えやすいように少し言いかえました。あとは早口にならないように注意し、ひまな時はずっと口ずさんでいました。

・何回か読んだ後に紙に何回も書きました。ケータイで写真をとって電車の中とかでも覚えられるようにしていました。話の流れを覚えるようにしました。

・本の内容を原稿用紙に移してページごとに見て暗唱、分からなくなったらまた見て暗唱の繰り返し。数ページ覚えたら最初から続けて読み、最後まで覚えた。

・携帯電話にメモをし、電車の中や暇な時間に覚えた。

・絵本を何回か読む。ボイスメモ (iPhone) に録音して聞く。聞いてから寝る。

何度も読んだり、紙に書いたりして覚えるという方法がほとんどであったが、中には携帯電話を使って写真を撮ったり、録音したりという方法もあった。覚え

方は各個人に合ったものでよいが、どれだけ時間をかけることができたかというのも重要であると考え。また、ただとにかく丸暗記をして、一字一句間違えないようにしてしまうのは良くない。

松岡 (1979) は、丸暗記について〈～それに、もし、お話を丸暗記しておぼえてしまうと、語っている途中で立ち往生する危険があります。「そこで」とか「ある日」とかいうことばひとつをいい間違っても、そのあとがつつかなくなったり、何かの理由で頭の中が突然まっ白になって、どうしても話のさきが出てこないといったこととなります。また一度つかえると、はじめからやりなおさないと、つかえたところから話がつづけられないということにもなります。こういう危険を避けるためにも、丸暗記をしてはいけません。〉としている。

途中で止まることなく、お話を自分のものとして語っていた学生が数名いたが、中でもつかえることなく語れていた3名 T さん、Y さん、S さんの覚え方は以下の通りである。

- ・少しずつ (1, 2 行程度) 絵本を見ながら読んだ後、絵本を見ずに読み覚えていく。それを進めていき「最初から絵本を見ずに読む→新しい所を覚える→最初から」を繰り返し、どうしても思い出せない所は絵本を見て確認する。(T さん)
- ・まずは本をじっくり読む。何度も繰り返して読んで、大まかなストーリーを覚えて説明できるようにする。その後細かいセリフ、文章も感情を込めて話すようにする。なりきる。(Y さん)
- ・まずストーリーを覚えて、それからセリフを覚えられるように絵本を読みこみました。(S さん)

「ストーリーを覚える」ということをしているので、途中で間違えることがあっても最後まで続けて語ることができていたと考える。特に S さんは、語り終えた後に話を聞くと、「途中で間違えたが、ストーリーから外れないよう自分なりに話を続けた」と言っていた。緊張の中で一字一句間違えることなく語るのは至難の業である。それなら間違っても、大筋を逸れず、また途切れることなく語ることの方が聞いている人達にとって良い。

そしてそれを聞いている人達に、「わからなくなって、自分でアレンジしているな」と気づかせないような語りをするためには、字面を追って覚えるだけでは難しい。それは、お話をどこまで自分のものにできるかにかかってくる。



お話を自分のものとして語ることができていた T さん。ほとんど詰まることなくテンポよく語る事ができた。

\*語ったお話『ねずみのかいすいよく』



語り終えた後に聞くと途中で話を忘れかけたが、自分なりにつないだという S さん。ストーリーから外れないよう、また聞いている者に自分なりにつないだということを感じさせなかった。

\*語った話『やぎさかなののろい』



ところどころ身振りを入れながら、語ったYさん。一人芝居を見ているようで、聞いていた学生もお話の世界に引き込まれていた。

\*語ったお話『ブレーメンのおんがくたい』

## 2. 実際におこなってみて、上手くできたと思うことは何ですか。具体的に記述してください。

- ・早口になりがちですが、練習しただけあって思ったより落ち着いて話せました。言い直しやつまるということだけは絶対したくないと思いました。それもなく、最後までやりきれたのは一番うれしかったです。
- ・なりきること。登場人物になりきって、ストーリーを進めていく。話しての時は淡々と話す。
- ・緊張したけれど思ったより覚えていたものが出てきたし、少し忘れた所も焦らず思い出すことができたかなと思います。
- ・緊張して題名を言った瞬間に内容がとんでしまったのに口は動いていてあいまに覚えていなくてよかったですと思いました。また人の顔や目も合ったりと話をできたのはよかったですと思います。
- ・あまり緊張を見せずにできたこと。

発表の際は、それぞれに非常に緊張していたが、語り始めると練習した成果を発揮することができた学生も多かった。しかし途中で止まってしまったり、忘れて語り直したりする学生がいたことも事実である。

成功の秘訣は、どれだけお話を自分のものにしてできているかにかかっており、それは単に文章を丸暗記するのではなく、お話を物語としてどれだけ自分の中に落とし込んでいるかということなのではないかと考える。

松岡(1979)は、著書の中で、

〈話の骨組の大体のところのみこめたら、今度は、いよいよことばをおぼえる段階にはいります。このときいちばん大事なことは、「絵にする」ということです。～お話を絵にする、お話のイメージを描くというのは、登場人物の姿、形だけを思い浮かべるのではなく、その人たちの位置関係、動作とその速度、その人たちの気持ちの動き、表情、全体の情景などすべてをひっくるめて、お話があなたの中で絵になって、流れるように動いていくことをいうのです。そして、ことばをおぼえるということは、その絵にことばをつけること、その絵を、ことばで表現することをいうのです。つまり、**お話をおぼえる**ということは、**テキストのことばによって、あなたの中にイメージを描きそのイメージに先導させて、あなたの中からことばを引き出してくる作業なのです。**〉

と述べている。こういったことができていれば、

緊張して頭が真っ白になったとしても絵が浮かび、自然に言葉が出てくるのではないかな。また絵が浮かぶようになるために、どれだけお話と向き合う時間を掛けたかも大きく影響している。

## 3. 実際におこなってみて、上手くいかなかったことは何ですか。具体的に記述してください。

- ・みんなの前に立つと緊張してしまって、頭が真っ白になってしまいました。一度止まってしまうと、なかなかお話が思い出せなかったです。
- ・緊張して声がふるえてしまったり、内容を忘れて止まってしまう事がありました。
- ・覚えきれていないところはグダグダになって、もはや想像で話をつくって話してしまった。
- ・話すことで精一杯で、子ども(学生)の顔が見られていなかった。

やはり、緊張したことによりお話を忘れてしまったり、声がふるえてしまったりといった記述が多かった。また、

- ・物語のキーワードになる「屁」を「おなら」と言ってしまったこと。言い直すのも変かと思ひ、最後まで貫いたものの、タイトルが「屁こき女房」だったので残念でした。

といったものもあった。昔話を語る際、こういった言葉の難しさを感じることもある。普段使うことのない言葉が多く出てくることで、混乱することもある。絵本の読み聞かせであれば字を見て読んでいくので、

読んでいる最中は立ち止まって考える事もあまりないが、ストーリーテリングでは、一度つまずくとどの言い方が正しいのか考えてしまうようである。

- ・目線をどうしたら良いのかが分からなくて、もう少しまわりを見て話したら良かったかなと思いました。
- ・目線、表情は難しかったです。顔や身体の緊張が表に出ないようにしたいと思いました。

どこを見て話せば良いか、手をどうすれば良いのか、を悩んだ学生も多くいた。目線について松岡 (1972) は、〈初めてお話をする人は、聞き手と目が合うと、お話を忘れてしまうような気がするのでしょうか、聞き手の視線をまともに受け止めようともせず、天井の一角をにらんだり、自分の足もとに目を落としたりしがちですが、これではせっかくのお話が、聞き手の心の中にはいっていきません。できるだけまんべんなく、みんなの顔を見て、目の中にお話を流しこむように語ることで。〉と述べている。

また、駒井 (2012) は、〈お互いに目を合わせながら進めていくお話は、コミュニケーションの基礎である視線を合わず姿勢を自然と身につけることができる。また、アイコンタクトをしながら、話を楽しむうちに信頼感が生まれてくる。表情も語りのうちであり、無表情や無意味な笑顔は話の内容と合わず、聞き手を惑わしてしまうため注意が必要である。〉と述べている。

学生同士で恥ずかしさもあるかと思うが、それ以上に話に詰まったり、忘れそうになったりした時に上を向いたり、目線を下げたりする学生が多かった。また間違った時に照れ隠して笑う者もいた。スムーズに語ることできた学生は、目線もしっかりと聞いている者に向けられていた。

語るにあたって学生たちが悩んだことが、身ぶりや手の置き所である。ストーリーテリングでは、あまり身ぶり手ぶりで話すことをしない方が良いのか。

松岡 (1991) は身ぶりについて、

〈ところで、お話の講習会や、勉強会などで、いちばん頻繁に出される質問は、「身ぶりはどの程度入れたらよいでしょう?」というものです。「どの程度」といわれても、「二割程度」とか、「五パーセント以内に」とかいうようにこたえられる性質の問題ではないので、この種の質問にはいつも困惑させられます。中には「身ぶりを入れてもいいでしょうか?」と、まるでおそろおそろ許可を求めるようなたずね方をなさる方もあります。～中略～この本のはじめにものべたことですが、語りには、こうしなければ

ならないとか、こうしてはいけないとかいった決まりは一切ありません。身ぶりも、入れなければいけないわけでも、入れてはいけないわけでもないのです。身ぶり抜きでのよい語りもあれば、身ぶりで生きてくる語りもあるでしょう。何度もくりかえすようですが、身ぶりを入れる入れないといった外側の形を問題にするのではなく、どうしたらその物語のおもしろさや味わいがいちばんよく出るか、ということから問題を考えていただきたいと思います。〉

としている。

学生の発表ではほとんど身ぶりはなかったが、1名の学生は効果的に身ぶりを入れていた。その学生は「お話に出てくる登場人物になりきって語る事ができた」と振り返っていたので、ここで身ぶりを入れると考えずにおこなっていたので、不自然には感じなかった。この学生のお話は先にもあったように、身ぶりで生きた語りであったと感じる。聞いている側は、一人芝居を見ているようであった。

4. 自分の選んだおはなしは、ストーリーテリングに適していましたか。そう思う理由、またそう思わないのであればその理由を記述してください。

- ・適していた・わかりやすい内容で、絵がなくても想像しながら聞けるお話だったと思います。
- ・適していた・話の流れがわかりやすかった。
- ・適していた・登場人物も少ないし、話の内容もわかりやすいと思っています。
- ・適していた・文がしっかりとあったので、絵がなくてもわかりやすかった。

ほとんどの学生が自分の選んだお話を、ストーリーテリングに「適していた」と感じている。

その一方で、以下の理由で自分の選んだお話が「適していなかった」と感じた学生もいた。

- ・適していなかった・主人公が1人決まっていた方が理解しやすいと思った。場面が変わると話についていけなくなる。『うさぎとかめ』
- ・適していなかった・主人公が1人決まっていた方が理解しやすいと思った。場面が変わると話についていけなくなる。『ねむりひめ』
- ・適していなかった・絵本を見ながら読むものだと思った。『サルくんとブタさん』(たどころみなみ)
- ・適していなかった・絵本で読むととてもおもしろいのに、絵の表現がないだけで何もおもしろくないと思ったから。『11ぴきのねこ』(馬場のぼる)

適していないと感じた理由については、『サルくんとブタさん』『11 ぴきのねこ』は、絵と一体になっているお話を選んだことにあるというのが大きな理由である。しかし『うさぎとかめ』『ねむりひめ』については、同じお話でも様々な人が本として出版しているので、どれを選ぶかによって結果が変わっていたかもしれない。

#### 5. ストーリーテリングをおこなってみて、感じたことを記述してください。

- ・絵本を読むのとは違う緊張がありました。どちらも人前でお話を読んでいます、ストーリーテリングの方が難しかったです。
- ・頭の中にしっかり入っていたら、いつも以上に子どもたちに目を向けて話すことができる。
- ・すごく緊張しました。でも終わってみて絵本を覚えて話をするだけで、子ども一人ひとりの顔がこんなにも見られるんだなと思いました。
- ・手に何も持たずに物語を伝えることで、子どもの想像力を広げることにつながると思いました。
- ・覚えているところの安心感とそれが一気に減っていく不安感と覚えていないところの絶望感がつらかった。次やる時には、ちゃんと覚えてからやらないといけないなと思った。とても緊張した。

初めてストーリーテリングをおこなった学生の率直な感想である。実際におこなってみて、絵本の読み聞かせとの違いを肌で感じることができている。また最後の記述をしている学生は、途中で話が途切れてしまい思い出すことができないまま終わってしまった。前半はしっかりと話すことができたのだが、後半は覚えることもできていないまま本番を迎えたというのがこの記述でよくわかる。これで終わらず、ぜひどこかで生かしてもらいたい。

そして実際におこなってみて、どうすれば良かったかを具体的に考えた記述が以下である。

- ・物語を知らない人に言葉だけで想像させるのは難しい。表情や感情の入れ方、声のトーンなどが大切だと思った。
- ・本を持たずにどう聞いている人たちに伝えるかはやっぱり難しいと感じた。想像をしてもらうための間やキャラクターの個性をどう引き出すかを考えさせられました。
- ・絵本で覚えて人前で話すことは、実際やってみると緊張してすごく不安でした。絵がない分子どもが集中

して聞いてくれるかどうかは、自分の力量次第だと感じ、しっかりと技術が必要になり、そのためには練習することが大切だと感じました。

- ・絵がない分、自分の声一つで表現しないといけないため、何を意識するかが大切だと思った。

学生同士でのストーリーテリングではあるが、初めて語ってみて自分の語りを省みることは必ず次へつながっていく。

松岡 (1972) は、〈別に、固苦しい“反省”を要求するわけではありませんが、語り手として、話の終わったあと、その「こうであつたらよかった」点を心にメモしておく必要があるでしょう。とくに、お話がうまくいかなかったときは、その原因がどこにあるか、よく考えてみるのが大事です。〉と述べている。授業内の課題として取り組んだストーリーテリングなので、「発表を終えたらもうおしまい」という学生もいるであろう。しかしせっかく取り組んだ課題であるので、ここで終わらせず、反省することにより次へとつながることができる。

#### 6. ストーリーテリングは、今後自分の保育にどのように生かせると考えますか。その理由も同時に記述してください。

- ・一度覚えると、結構覚えていられるもので、今でも覚えています。遠足に行ったときの空き時間や午睡の時にストーリーテリングが生かせると思います。絵本がなくても、自分の記憶力と声があればストーリーテリングはできるので便利だと思います。
- ・毎回同じように絵本を読むのではなく、たまにはこのようないつもと違うこともやってみようと思いました。ストーリーテリングができたなら園の外でも（遠足や外での活動の時）使えるなと思いました。よい経験ができました。
- ・今回覚えたことによって、自分の中に1つレパートリーが増えたと思います。

ストーリーテリングを初めておこなってみて、またやってみようという記述である。経験したことでストーリーテリングをおこなうことの良さを実感できている。

また子どもたちに育まれることに着目した意見は、以下の通りである。

- ・子どもの想像力を育てるときにおこないたいと思いました。
- 次、するときにあれば、風景や描写のあるようなお話

にチャレンジしたいと思いました。子どもが頭の中で世界を広げていけるような話をして、そこからそれぞれの頭に思い描いた風景の絵を描くなどしたら、おもしろいかもと思いました。

- ・子どもたちの想像力が豊かになり、聞く力を身につけることができる。
- ・子どもの集中力や目を見て話すコミュニケーションを取ることができ、また、想像や発想が豊かになる。

今回は語る相手が学生だったので、ぜひ子どもたちに語ってもらいたい。そして子どもがどのような反応を示すかも貴重な経験になるであろう。それが自分の予想していた反応と違ったとしても、保育の幅を広げるといふことにつながっていく。子どもがキラキラと目を輝かせたり、真剣な表情で自分のお話を聞いたりしてくれることで波にのって語るができる。

しかし、途中でよそ見をしたり、ざわざわと落ち着きがなくなったりしてくると語る側も早く終わらせることばかりを考えるようになる。

このような経験が、次にどうすれば子どもをひきつけることができるのかを考え、何度もお話を練習し、子どもの前で語る自分をシュミレーションするなどにつながっていく。どこかで子どもの前で語ることをやってもらいたい。

- ・話を覚えていたら、子どもたち一人ひとりの目を見て話すことができ、より親しみのある保育ができると考える。なぜなら子どもたち一人ひとりの反応を見ながら話ができるから。

このようにやってみて初めて気づくことができた学生も多い。絵本や紙芝居にはない楽しさを感じることができている。

しかし、以下のように感じた学生もいた。

- ・子どもたちが静かにならないときなどに、急に話し始めると静かになりそうだった。
- ・本がなくてもお話ができるので、保育の間の待つ時間など手あそびだけでなく時間を有効に使えと思った。
- ・手元に何も無い時、近くに絵本がなく次の活動まで少し時間が空いてしまった時などに生かせると思う。子どもたちを飽きさせることなく時間を過ごせる。先生に注目しているので次の活動にうつる時、スムーズにうつることができるかもしれない。

活動と活動の合間や空き時間に語ることは、悪いことではない。けれどもこれではストーリーテリングが単なる道具でしかない。静かにさせるために、や時間

つぶしに、ではお話を楽しむことは難しい。次の活動時間になれば、途中でお話を終わらなければならないし、静かにさせるために語るのでは、子どもに聞く気持ちができないまま語り始めることになる。

ストーリーテリングだけでなく、絵本、手遊びを単なる道具として使うのではなく子どもと楽しむために保育に取り入れてもらいたい。

#### 4. おわりに

授業の課題として取り組んだストーリーテリングであったが、学生に様々な見通しや今後に対する思いが生まれていた。ただ、この先ストーリーテリングをおこなうことがない学生も多いと思う。特にストーリーテリングに対して、上手いかなかったという苦しいしかなかった学生はなおさらである。

松岡 (1991) は、〈また、なれない方は、語りの途中でちょっとことばにつまったり、いいまちがえると、それで話がすっかりこわれてしまったとお思いになるようですが、決してそんなことはありません。語り手の気持がしっかりお話のなかにはいって、その場にお話の世界の空気がかもし出されていたら、その空気は、そうたやすく破れるものではないのです。〉と述べている。さらに〈わたしは、ある保育園で、ことばにつまった先生を、子どもたちが実にしっかり支えて待っているのに感心したことがあります。話の先へ気持ちを走らせている聞き手は、むしろ語り手をつまづきから立ち直らせる力になってくれます。小さなつまづきが致命傷になるのは、語り手が、自分の語り方ばかりに気を向けているときです。語り手がまずお話に気持ちを集中しないで、どうして聞き手にお話の世界を支えてくれるよう要求できるでしょう。語るときは、自分のことでなく、お話のことを第一に考えましょう。〉

今回は、お話のことを考えて、お話に集中することができた学生はあまりいない。そうであるからこそ、この経験をこのままで終わらせず、お話を自分のものにしてもらいたい。そして是非とも子どもの前で語ってもらいたい。この中の何人かでも、保育や教育の現場で子どもにストーリーテリングをおこなうことがあれば、授業内でストーリーテリングに取り組んだ意義があったと考える。

筆者はこの授業を担当する限り、ストーリーテリン

---

グをおこなっていくつもりであるが、今回学生たちの感じたことを生かし、今後の授業改善に役立てたい。

そして授業内でストーリーテリングに取り組んだことで、子どもの前でも語りたいと考える学生が増えるような授業内容を考える必要があると感じた。

## 5. 引用文献・参考文献

松岡享子 (1979) 『おぼえること (レクチャーブックス ◆お話入門 3)』 公益財団法人東京子ども図書館 p17-p18、p29、p34

松岡享子 (1991) 『よい語り一話すこと I (レクチャーブックス ◆お話入門 4)』 公益財団法人東京子ども図書館 p88-p 89 p120-121

松岡享子 (1972) 『お話の実際一話すこと II (レクチャーブックス ◆お話入門 5)』 公益財団法人東京子ども図書館 p86

駒井美智子 (2012) 『保育者をめざす人の保育内容「言葉」』 株式会社みらい p109

小川清実・編 (2010) 『演習 児童文化 保育内容としての実践と展開』 (株) 萌文書林  
(小川清実・森下みさ子・内藤知美・河野優子・小林由利子) p58-p62

## ピアスーパーバイザーからのコメント

ストーリーテリングという学生には未経験の分野を、筆者の実務経験から保育者に必要な手法として教え、成功に導くための気付きを引き出されている。昔話でさえ、語られることが少なくなった現在、さまざまなお話をストーリーテリングの題材として検討し、絵本や紙芝居にはない、子どもたちとのダイレクトな空間共有を可能にする手法に対する実践報告は子どもに関わる保育者にも、学生に対する教育活動にも有益であると思われる。

(担当：三木麻子)